
飛ばされ魔王のデタラメな毎日

遊希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

飛ばされ魔王のデタラメな毎日

【Nコード】

N1047W

【作者名】

遊希

【あらすじ】

九条燎牙は魔王になった。異世界に召喚され、あれよあれよの内に神様に能力まで授けられ、仕方なく魔王に………なった筈。ハーレム（本人にその気はない）したり、チート（どっからどうみても）を駆使したり、とにかくやりたい放題で進む、魔王リョーガの異世界生活ここに開幕。作者の都合により、打ち切る可能性がございます。ご了承ください。

001 エセ神様（前書き）

他の二作品をほったらかしにして、この作品を開幕させたのには理由がありました。

作品の見直しが余儀なくされました。

要は、内容に詰まりました。

なので、更新をストップします（、 - 、 - ）

といってもそれぞれに書きかけがありますが（、 - 、 - ）

まあ、勉強の片手間の作品ですがどうぞごゆっくり（、 - ）

俺が目を覚ますと、それはそれは白い天井が出迎えた。
恐らく、大理石で出来ているであろうこの天井を見つめながら、ふ
と考えた。

(……………ここ、俺んちじゃないな)

夢に、こんなのが出てきた。

偉く質素な、キリストみみたいな格好した男。

そいつは俺を見るなり、こう言った。

「ゲラツチヨ！」

「……………エ ギア？」

よくわかんないが、誰だコイツ。知り合いの顔にこんなヤツいない
よなあ。

「こんなヤツとは失礼な」

「わあバレとるんかい」

ものの見事にバレていた。コイツ、心網使いか!?

「君はアレだ、うん」

「はい?」

どうやら俺はアレらしい。アレが何かはまるで理解出来ないが、どうやらアレらしい。

「明日から魔王ね」

「あーはいそうですかって、ええええ!?!」

唐突なオッサンの一言に度肝を抜かれた。てか、なんで魔王?!

「あーそれはアレだ、うん。気まぐれ」

「はあああつ!?! てかまずお前誰?」

「我輩は猫」

「なわけなかるうがつ」

思わず突っ込んだが、どうみても不審なヒゲオヤジにしか見えないこのオッサンが猫なわけない。

「ではなく神だ」

「へえ? なら神様、一つ聞きたいことがある」

「なんだ愚民？」

「愚民言うなっ！……………なんで魔王なんだ？」

神は居住まいを正すと、右に左にウロウロ歩き始めた。

「あー、理由はいろいろあるが、簡潔に言えばこうなる。まず、魔王が死んだ。魔王には後継者が居なかった。臣下は慌てた。魔導師が提案した。『異世界の人間って強いらしいですよ』って。あとは察しの通り、召喚魔法でホイッと、ね」

「……………」

あまりの理不尽さに、思わず核分裂するかと思ったが、なんとか留まった。

まあ、いろいろあつて死にたかった俺には丁度いいかもしれないが。

「んで、こつちには帰れるワケ？」

「無理」

神の即答に卒倒した。

もういいや、魔王だろうがなんだろうがやればいいんだろ。

俺はその手のオカルトは好きなんだ。オカルトだらけならむしる歓迎ではないか。

「それで、一つ聞きたいんだけど、これは夢だよな？」

「起きたらわかる。九条燎牙クシヨウリョウウガ、いや、魔王よ」

神は真剣な顔を見ると、俺に言った。

「……………がむばれ！」

「まともな言葉をつかええええつつ

」

そんな一部始終を思い出した燎牙は、

「あー、俺はアレなのね」

と独り、呟いた。

城内は朝から騒がしい。

と、召喚士のクウは思った。

「まあ、騒がしくしたのも私が原因なのでしょうけど……………」

などと呟いても誰も気づかない程には忙しかった。

それもその筈。

今朝、クウ自身によって件の新魔王を召喚したからだ。召喚したのは室内だが、まだだれも魔王を確認できるものはいない。それは、部屋自体に封印がかかっている、魔王が目覚めなければ部屋が開かないようになっていた。

それが、先程解かれたものだから、大臣やメイド達が慌ててるのだ。でも、と置いてから、クウは思った。

(1番先に謁見する権利があるのは私なのですけどね)

召喚士には、1番先に魔王と会うことが出来る、と決められていた。それは言ってしまうだけでも光栄なことであり、歴史にのるような魔王になれば、その召喚士であるクウも歴史になるから、クウとしてはこの上ない嬉しさであった。

「クウ！」

と、そこでクウを呼ぶ者がいた。クウが振り返ると、やはりいつもどおりの姿がそこにいた。

「どうしたのマリエル？」

「どうしたもこうしたもないよクウ！早く謁見してくれってピリオール様が煩いの！」

ピリオール、という名を聞いてクウは溜息をつく。一級書記で、召喚課の課長。つまり、クウの上司である。

真面目で仕事に煩く、尚且つ見た目がハゲデブのゴブリンエースなので、召喚課の皆から（主に女性から）嫌われていた。

ちなみに、クウはハイエルフ、マリエルはハイサキュバスという種族である。

嫌な顔をしつつも急ぐクウに、横から一言。

「今回の魔王様、イケメンだといいいねっ！」

「ふっ、不謹慎ですこの子っ！魔王様のお顔に評価などっ……………！」

「ははっ、相変わらずカタいねえクウはっ」

マリエルは笑いながら飛行する。勿論ハイサキュバスならではの、飛行能力である。

当然、森の種族であるエルフの上位種であるハイエルフには、翼の概念がない。

ただし、ハイエルフの脚力はサキュバス種のそれ（・・・）とは比べものにならないほど発達していて、速さで言えば互角の勝負を繰り広げ

る前に目的地に着いた。

開闢の間。

代々重要な召喚に使われてきた、歴史のある部屋だ。

その扉は、先程までは淡い紫の光を放っていたが、今はその光を失い、荘厳なエルラドの木の質感だけが感じられる。

その部屋の前には、大勢の重役が集まっていた。

国務大臣を始めとした様々な大臣から、メイド長や料理長などの各責任者が揃っている。

勿論、ビリオール書記長も正装して並んでいた。

クウとマリエルに気づいたビリオールが近づいてくるのを見て、クウは気づかれない程度に嫌な顔をした。

「お前は何をやっているのだ、クウ！早く謁見を始めなさい！」

「す、すみませんビリオール書記長………！」

ビリオールの言うことは最もだった。

クウは扉の前に立つ。

新しい魔王となる方に謁見するとあって、胸が高鳴るが、反面物凄い緊張を要した。

深呼吸を挟み、一言、

「これより謁見を始めます」

と言い放つと、扉を開いた。

しばらく大理石の天井を眺める。

それに飽きた燎牙は、起き上がることにする。

まず、自分の確認からすることにした。
皮膚を見た。青く変化してたり……とかはなさそうなのでよかつた。
服を見た。パジャマではないが、いつもの寝巻き姿だった。
部屋を見た。大理石で出来ていて、ところどころにミステリアスサークルみたいな、というか恐らく召喚魔法の類の陣が描かれてあった。

なにか変わった点というものは、おおよそ見つからなかった。

（あのエセ神は確か、俺が「魔王」になるとか言ってたな）

ついさっき言われた言葉を思い出した。

知らない部屋で目覚めた以上、ただの夢では済まされないだろう。

（それに、もしアレが本当ならここは異世界だ。それも下位相関でない、多分上位相関の世界）

魔王なんてシステムが存在する以上、この世界には少なくとも魔法の類が存在するかもしれない。

地球にも魔女だの錬金術だのは存在したらしい。

………まあこの目で見てない以上は適当なことなんかは言えないけどな。

不老不死だの黄金の精製だの、今の人類では不可能には到達不可能な技術がそこにあったなら、あきらかに魔法を使える人間は、そうでない人間の上位相関に相当する。

生物的には同じでも、あきらかにポテンシャルが違う。
自転車をただ漕ぐのと、二トロエンジンをつけて漕ぐくらいには差があるということだ。

(ただの人間の俺に、そいつらの親玉なんぞ務まるわけがないだろ……)

第一、魔王が存在するなら、それこそ地球で「悪魔」と呼ばれていたら俺も存在するだろう。

わかりにくけりゃ鬼でもいい。とにかくその類の、強力な魔族とやらが存在するのでは、人間の俺には出る幕すら無くなる。そうなるよ。

(なんで俺、召喚されたんだろ……)

当たり前前の疑問だが、自然と思考がその解答に行き着く。そんなモンがいたら、俺の存在価値などあるわけがない。

だから、根底を覆すなにかがあるはずなのだ。人間を魔王として召喚する、大きなメリット。

そして、一つのメリットに行き着く。
それは。

「あ、そっか！俺が厨二病患者だからか！」

そう、彼は厨二病だった。

燎牙が勝手に一人合点を打ったところで、声が聞こえた。

「ゲラツチヨ」

「……………エセ神様ですか」

相も変わらず変な挨拶をしてくる声の主は、先程の神様。
やはりキリストみたいな格好をしているが、先程とは違う箇所があった。

「あれ？ 神様パツキンだったか？」

「まあ、なんだ……………その、あれだ」

エセ神様はなんかいろいろ身振り手振りを頑張っていたが、やがてやめた。

「気分」

「その解答0点だろ」

まあともあれ。

燎牙は神様にいくつか質問したいことがあった。
先程の疑問に関する形で、また新たな疑問が出てきていた。

「なあエセ神様」

「誰がエセだこら」

「なんで俺が召喚されたんだ？　なんかこの世界、強力な魔族的な存在にいるだろどうせ。だったらなんでわざわざ人間の俺なんだ？」

「うむ、いい質問だ愚民」

「愚民いうな」

「まあ、なんだ。説明するとすればこういうことになるな」

神様は語り出した。

まず、この世界に名前がないこと。この世界自体は、地球世界と同位置に存在し、同位相関としての平行世界が幾つも存在する、言わば「パラレルグループ平行世界群」の内の一つであること。

この世界には、地球世界には存在しなかったとされる、魔族の類が存在すること。人間と魔族の割合自体は4対6ほどである。

この世界には、地球世界で羨望や怨嗟の対象となり、今はなき古代の技術、ともされたが信じていた者は少なかった、「魔法」が存在する。もちろん、白や黒や赤などのカテゴリーは存在せず、ただ魔法として存在するだけだが、漠然と魔法を使用する者達には、使い分け方がわかっていた。

この世界には、大陸が三つある。人間世界として、幾つもの国が競り合う大陸、「デイドス」。魔族が中心の「魔界」が存在し、四つの大国が睨み合う大陸、「オズライア」。そして、未開の地であり、「勇者」と呼ばれる者達が幾人も踏み込んでいく、古龍の棲む大陸、「シヤガルディア」。

お互いの世界があまり干渉せずに、大陸内の小競り合いを繰り返してきたこと。

この国が、「アークレイド」と言う国で、先帝ロズモイ二世が倒れ、

新たな皇帝を決めなくてはならなかったこと。
そして…………。

「…………じゃあなんだ？ 地球世界の方が遥かにポテンシャルが高いから、そっちから召喚した、と」

「うむ。あれだ、ポ モンでも火蜥蜴をレベル100にするよりも、火龍にしてレベル100にしたほうが強くなるだろう？」

「名前隠して名前漢字にして名前の意味だけにして…………、神様だからって著作権には勝てんぞ？」

神様は、いかにも「わかってるよんなことぐらい！」と、反抗期の息子ばりに嫌な顔をした。

「でもポテンシャルが高かろうが、なにも能力なぞないんだが」

「それを今から発現させるんだよ」

そういつて神様は、トীগミみたいな服の内側から、ビー玉くらいの虹色の塊を取り出した。

「……………なに、それ」

「これは「鍵」だ」

鍵、か。

玉が鍵になるとはまた厨二な。

……………俺が言えた義理じゃないが。

「制止」
レストレイン

神様はビー玉を指先でつまみ、それを上に向けると、そっと指を離した。

どういう訳か、玉は空中に制止している。

「こいつが発動すると、対象の潜在能力を開花させることができる。もちろん対象は、九条燎牙、お前だ」

制止した玉は、やがてゆっくり回りだした。

次第に回転数をあげる玉は、微かな光を放ちながら、何故か膨張しつづける。

まるで、遠心力に引っ張られているかのような形で、ドーム状へと広がりつづける。

「と、まあこのくらいかな」

神様が呟くと、回転がピタと止まる。

そして、膨張も止まった。

「それじゃ始めるけど、大丈夫かな？」

「あ、ああ」

神様はドームの天井部分、つまりてっぺんに向かって、指を鳴らしながら呟いた。

「開花」
フローアマウン

瞬間、ドームが燎牙を中心に、キュツと小さくなっていき、やがて縮みながら燎牙の中へ消えた。

その瞬間。

燎牙は脈動を感じた。

何か血が沸き立つような。

人で無くなるような。

それでいて、頭だけは急速に冷えていった。

頭が冴え渡る。

「ほお……………」

「……………神様、結局俺の能力はなんだ？」

神様が感心したような声を上げたのに気づき、燎牙が答えをせがむ。それに対する、神様の答えは。

「続きはWEBで！」

「はよ答えろや」

「は？ 二つあんの？」

「うむ、本来は一つしか持てない筈だったんだがな」

神様曰く、何故か二つも能力ついてしまった。

二つ発現することは、軌跡に近いらしい。

まあ二つあっても害はないとのこと。

「一つ目は、「全知」だ」
ゼネラル

「なんすかそれ」

「うむ。要すれば、「思い浮かべた事象を、わかりやすいイメージとくつつけて、それを無理矢理魔法として発現させる」能力、になるかな」

療牙の頭上に、いくつもの？マークが浮かんだ。
わけわからん。

「どゆこと？」

「まあ………ようは、雨をが降らせたい課長。しかし今日は晴れていた」

「課長？ なぜ課長？」

「そんなときは、まず雨を思い浮かべる。それから、雨が降ってるイメージがしやすい言葉を選び、あとは右手が勝手に動いて構成された魔法陣に対して、イメージしやすい言葉を詠唱すればOK」

「無視かい」

なんか試してみ？と神様が言うから、やってみることに。
とりあえず、指先からライターみたいな小さな火を燈そうとしてみることにした。

まず、ライターの火を想像した。
次に、詠唱する、イメージしやすい名前だが、「ライター」でいい
と思った。

「ライター！」

真上に伸ばした指から、ポツと吹き出した小さな火。
だが、それは燎牙が既に人外である証拠でもあった。

001 エセ神様(後書き)

更新は不定期です。
悪しからず。

002 魔法と指輪と謁見（前書き）

や、一ヶ月ぶりくらいの投稿ですね）、・・、（

文化祭やら体育祭やら夏休みの課題（負の遺産w）を片付けておりましたら、時間があれよあれよと……（涙）

v まあ、今回もssadadですけど、ヨロシクお願いします。（。――）

「んで、二つ目は？」

ライターの火を指へ点したまま、燎牙は問うた。
場所は依然として大理石みたいな物で出来てる部屋。

「二つ目は、「ダークマター暗黒」というみたいだな」

「みたい、とは？」

話相手は、相変わらずキリストみたいなオジサン。
自称神様である。

神様は何か悩んでいるような、うーん、というような唸りをあげていた。

「それが、使用する魔法総てに闇の属性を付加するってやつなんだけど……………」

「闇属性？」

神様は頷く。

魔王だし、闇属性ぐらい付加されたところで特に問題はないんじゃないか、と燎牙は考えていた。

「問題は、魔王なのに何故今更闇属性を付加しなければいけないの

かつて所なんだよなあ……………」

……………俺の素朴な予想は、見事に疑問へと昇華した。

（まあ、確かに一理あるな）

魔王ならば、闇属性を使えないのはおかしい。

だからといって、闇属性を付加しないと使えないようなやつが魔王にはなれないかといえば、そうではないだろう。ないだろうが……………。

「まあ、この能力に関しては、ほぼなにも説明はないかな」

「そうすか」

神様は一息ついた。

その瞬間、今まで聞こえなかった喧騒が外から聞こえてきた。まるで、聞こえないように……………（……………）されていたかのよう。

「外が騒がしくなってきたことだし、少し急ぐとしよう」

「魔族が集まってるのか？」

「まあそうなるな」

神様は鷹揚に頷いた。

そんなことより、と神様。

「次は魔法の基礎の話でもしよっかな」

「ああ、頼む」

「……………魔法は、さっき使っただろうからわかると思っけど、魔法陣と魔法の詠唱が必要なんだ」

「よくある魔力云々は？」

「MPみたいなモノだと考えれば大丈夫だ」

「それで、魔法陣と詠唱がなんだって？」

「それで、基礎だけ教えておくと、その二つともが既存の魔法には必要な技術になっているんだ」

「そりゃさっきも言ったな」

「だけど、ここからが重要なんだ。この二つの内、魔法陣の方には既存の魔法のものを改良してしまうことが出来るのさ」

「……………？」

「つまり、君の出す、見たこともない魔法陣だって改良されてしまふということなんだ」

療牙にはイマイチ意味が理解できない。

というのも、なぜそれが問題なのかわからないからだ。

国力増強に一役買うのではないだろうか。

「療牙、では聞くが。それが敵に知れ渡れば脅威にならないか？」

「……………
アンチスベル
対抗魔法か」

アンチスベル
対抗魔法は、相手の放つ魔法に対しての、打ち消しの効果を持つ魔法のことである。

神様は、療牙がそれを知っていたことに驚いていたようだが、厨二病の療牙からすれば当然の知識だった。

「そう。だからこそ、自国の知識として隠さなければならぬし、それが療牙独自の魔法ともなれば味方からも隠さなければならぬ」

「誰が敵になるかはわからない、か……………」

療牙は、概ね（・・）納得した。

だが、肝心のどうやって知られないよう隠すのかを聞いていない。

「で、神様とやら」

「神様だ」

「どうやって魔法陣隠すねん？」

なんだそんなことかかと思ってんだろっとなあ、神様。

「なぜばれた？」

「……………サイコスキャンニング
脳内解析かよ」

「はっはっは」

「まあ、あれだ。それは凄く簡単なことでいいんだ」

「簡単なら早く言えばいいのに」

燎牙はわざと聞こえるように言ってみるが、神様は平然としている。
やはりメンタルは強いが。

「で、どうなんだよ？」

「つまり」

「

「魔法陣構築しなきゃいいじゃん」

「ああー、っていやそれちょっと待て！」

燎牙は頷きかけたことを少し反省しつつ、神様に食ってかかった。

「魔法陣作んなきゃ魔法発動しないじゃん！意味ねえじゃんか！」

「いやあ、だってさっき言ったのは基礎の話だよ?」

神様はやれやれとばかりに療牙を見ながら話を続けた。

「魔法陣を構築しないで魔法を発動できる奴は、おそらくこの世界にはいない。それは、この技術がまだ知られてないからだよ」

神様はつづける。

「加えて、魔法陣が描けないんじゃ、魔法の劣化複製は無理に近い」
「なるほどな」

「そついうことね」

さて、と一息つく。
神様は療牙に向き直る。

「魔法陣を書かない、『無陣魔法』の方法だが。魔法の詠唱時に、魔法陣の形をイメージをするんだ」

「イメージ……、それだけでいいのか?」

「頭の中で魔法陣を完成させれば、それを見る方法は脳内解析のみになるんだよ」

「イメージ、ねえ」

さつき見た、「ライター」の魔法陣を思い出す。
確か、あんな感じ……………？

「ライター！」

ポウという音とともに、指先に火が灯る。

燎牙は、その火を眺めながら呟いた。

「なるほどねえ」

ちよつと待て。

燎牙は疑問に思った。

「神様。今のは上手く行き過ぎ)…………(じゃないか？」

「どういうことかな？」

「あんな鮮明に)…………(思い出せるかよ、見たばっかの物を」

「確かに……………いや、ああそうか」

神様は納得しかけて、急に一人合点を打ちはじめた。
何だというのだろうか。

「「どういうことだ？」」

「さつき、ダークマター「暗黒」について説明したよな？」

「あの、閻属性自動付加だったかなんかか？」

「あれの本当の効果は、どうやら」一度見た魔法陣を絶対に記憶し、鮮明に思い出す」ことにあるらしい」

らしいってなんやねん、と思わず心の中で突っ込んでしまったが、

「これなんというチート属性……………」

「まあ、これで魔法については大丈夫だろう」

神様が魔法についての講義を終えたその頃には、外は静まりかえっていた。

あの喧騒が嘘のように止んだ。

その事実には神は。

「ふむ、そろそろ謁見が始まるな」

「謁見？ 誰に？」

「お前にだぞ？」

俺！？と燎牙は驚く。

魔王であることを忘れてはいまいか。

「お前は魔王ジャマイカ」

「そーゆるスラングを神様が使っなよ」

「いやん差別よっ!」

「はいはいそーですかっ」と

神様の言葉を受け流しつつ、燎牙は扉を見遣った。

ざわつきが止んで、確かに何か始まりそうな気がする。

燎牙は神様に向き直る。

「なあ神様。時々助言してくんね?」

「……………いいだろう。これを嵌めておくといい」

そういつて、黒い指輪を渡してきた。

材質が何かはわからないが、ごてごてした装飾もなく、ただしトライバルみたいな紋様が彫つてあるのみのシンプルな指輪。

「これは?」

「我輩のカケラ、だな」

「カケラときたか……………」

燎牙は神様のカケラを、右の中指に嵌めてみた。

どうにもブカブカで、指から抜けないどころか手を振れば飛んでいきそうだ。

「コレすごいブカブカだぞ?」

「まあじきにわかる」

燎牙の疑問に対する神様の答えは、とても曖昧だった。神様は何か唱える。

それも、聞き取れないレベルの音量で唱えられた、長い詠唱。

そして、

「なにを……っうお!？」

燎牙の手元にも変化が。

とてもブカブカだった指輪が、いつの間にか指から離れなくなるサイズにまで小さくなっていった。

「ってコレとれねえじゃん!」

「別に大丈夫だろう。ソレは絶対錆びないし傷つかないし不意に抜けないし」

「まあ……ならいいか」

燎牙は仕方なく顔をあげた。

が、そこには既に神様の姿はなく。

声は、

「どうした？ 我輩はココだぞ？」

指輪から聞こえてきた。

クウが重たい扉を開くと、正面に台座が見えた。代々召喚者を降ろす場所に使われる、座標としての台座。その下には、座標を定め、召喚をより行いやすくするための、召喚陣。

部屋自体は大理石で出来ており、本来ならその大理石の台座だけが見えるはずだった。

台座には今、誰かがいた。

黒い髪に黒い瞳。

見たことも無い服を着ているその人間は、台座に腰掛けていた。

あれが、次期魔王様。

そう思うクウの胸は高鳴っていた。

次期魔王は、やや驚いた表情を浮かべていたが、それでもなぜか落ち着いていた。

まるで、謁見を予め（・・・）知っていて、しかも謁見に来るのが人間ではないと予め（・・・）知っていたかのような振る舞い。それが、知らず知らずクウに期待させていた。

台座へ歩み寄る。

台座まではそう遠くなく、クウは次期魔王の前で、跪づいた。

そして、

「よつこそアークレイドへ、魔王様」

謁見した。

「ようこそアークレイドへ、魔王様」

扉を開くなり、歩み寄ってきて跪びいた少女（？）に、そんなことを言われた。

燎牙自身にとって、そんな経験はこれまでの人生で一度だってなかったし、これからも無いだろう、考えるまでもないことだと思っていたことが。

まさに目の前で一瞬の内に行われた。

（よくあるトリップモノだと、こんな時どんな感じだったかな………）

燎牙は召喚された事情を、少なからず知っていたが、それはあえて伏せることにした。

というか、自分の能力の都合上、そう易々とこれまでのことを話すわけにもいかなかった。

なので。

「……………これは夢か？」

白々しく、イマイチ事情が飲み込めていない感じを出した。

寝ていたのだから、妥当と言えば妥当。

それに対し、目の前の巫女さん衣装の（耳がやたら長い）少女が言う。

「いえ、現実です。やはり事情が飲み込めてらっしやらないようですね」

「当たり前だ、つーかなんだココ、そしてお前は誰だ？」

白々しい挙動不審さである。

如何にも事情知ってますよとでも言いたいみたいだ。

しかし、そんな白々しさには巫女さん少女は気付かないのか、

「ここは大陸オズライアにあるアークレイド帝国という国、その王宮ラザス城です。そして私は召喚士のクウといいます」

跪^つづいたまま、そう述べた。

更に白を切ることにしようか。

そうなると、あとがやっかいなんだがなあ、この巫女さん少女の反応が気になるなあ。

とか思いつつ、

「オズライア？ 聞いたことないし、大体何故俺はこんなところにいるんだ？」

結局またもや白々しさが目立つ返答に。

そもそもこの時点で落ち着いているのがおかしい、と気づくべきであるが、この少女は気づかないみたいだ。

療牙が落ち着いているのは、事前情報があったのと、地球世界で彼は古流武術を習っていたおかげなのだ。

「ここがあなた様の世界とは違う世界だからです。 私が召喚させていただきました」

さらに続ける。

「あなた様に、我々の国の王になっていただきたいのです」

あまりにも、セオリー（・・・）な解答に燎牙は。

「……………また随分と、勝手な理由だな」

困り顔をしてみせたが、内心では笑っていた。

あまりにも、よくある召喚モノすぎて笑えてきたのだ。

「勝手なのは重々承知の上で申し上げております」

巫女さん少女が頭を低くした。

跪びいて、さらに頭を低くするなど凄じ芸当だ、などと変に感心してしまった。

よく見ると、巫女さん少女が開いた扉の向こう側には、なんだか体が赤いヤツとか青いヤツとか、また翼が生えてたり顔が蜥蜴だったり。

その辺ですら王道すぎて笑えてくる。

「……………お前が俺を召喚したんだよな？」

「はい、それが何か？」

「今すぐ元の世界へ帰せ」

半ば脅迫っぽくなるが、妥当なのではないか。
ましてや魔王になるような器を考えれば、少し攻撃的に話しても大丈夫であろう。

これには巫女さん少女も困ったらしく、若干の焦りが見えた。

「申し訳ありません、それは無理です……………」

「何故？」

「それは…………、そういう仕組みだから、としか表現できません。召喚した対象は、この世界から出られなくなるという、よくわからないチカラが働いているよう……………」

巫女さん少女の申し訳なさ度が上がってきたところで、燎牙は考えた。
ま、そろそろいいか。

「……………はあ、なんだよソレ。で、俺はどうすりゃいいんだ？」

少女の顔が少し元気を取り戻す。

後ろの奴らがザワザワしてたが、とりあえず無視した。

「今日のところは、お疲れでしょうから、休まれてはどうでしょうか？」

「なぜに提案？」

「あつ、失礼しました！」

そういつて、顔を赤くする巫女さん少女。
この子なかなか可愛いな！。

ま、それはともかく。

「……………一人部屋だろうな？」

「あ、はい！ 前魔王様のお部屋でございます。とりあえず今日は
そちらに」

「なら案内してくれ」

そういつて立ち上がる。

途端に、目線の位置が変わる。

少女、クウと言ったか。

身長150センチくらいだろう、随分小柄な少女だ。

クウは、療牙を見上げ。

「案内させていただきます」

と、言った。

入口の奴らは、もう居なかった。

クウが謁見を行っている間、外の連中　大臣たちは、ずっと黙っていた。

かのように見えたが、マリエルとその上司、ビリオールは、念話サイコパスの魔法を使い、会話をしていた。

『ビリオール様、ビリオール様』

『……………！？　こんな時に何だ？』

『今度の魔王さま、どうですかね？』

『どつって、どついうことだ？』

『我々魔族が、魔王としての人間に仕えるんです。我々に対して、理解とか仁義とかそういうのがある方なんでしょうかね？』

『知らん。ただ、我輩が見る限りは　』

『期待は、出来そうだ』

『それは、楽しみです』

『ああ……………、む。魔王様は退出のようだ。今日のところは謁見は無しだな』

『ええーッ!?!』

『つべこべ言うな！ 我輩とて一度は謁見して起きたかったわ！！』

そう言い放って、ビリオールは召喚課のあるほうへ歩いていった。

残ったマリエルは、やや困り顔で呟いて、立ち去った。

「期待は出来そうだが、か」

002 魔法と指輪と謁見(後書き)

更新は不定期になります)・・・)

最近ログホラよんだらRPGがやりたくなくて、

なんかいいのありませんかね？

さて次回予告

003 (仮)魔王の自覚

お楽しみに！

003 私室と夜闇（前書き）

えー。

ストックがまともに書けてないまま出すのは本来不本意なんですが

……

明日から大会&来週からテストなんで、ちょっと間を持たせる為に三話を投下します。

というわけで、遊希です。

最近涼しいです。

度重なるアニメとラノベの奔流に、まともに次話も書けませんww

ともあれ。

まずは第三話をどうぞー

003 私室と夜闇

超巨大で、見るからに柔らかかそうなベッドを始めとする、絢爛豪華な調度品の数々。

壁には、なにかの（おそらく城下街と思われる）風景画。その壁もまた豪華の一言。

そんな部屋げんじつに、療牙はややげんなりとした。

ここは、先程の大理石でできた部屋から移動してきた、「魔王の部屋」である。

魔王なんだから部屋が広いのは当たり前だとは思っただが、こつもぴかぴかとしているとどうも落ち着かない。

質屋に出したらとんでもない額になりそうだなあ、などと呑気に考えていると。

「ほかに困ったことがあれば、部屋の外の衛兵にでも……魔王様？」

「え、あ、ああ」

ここまで案内をしてくれた、侍女の声で我に返った。

先程の、クウという少女とは色々な意味で違うこの侍女は、ナルフェルと名乗った。

金髪翠眼、眼帯をしていて、多少は異なるようだが、服装はやはりメイド服のようだ。

(あれ、地球の文化だよな……。なんでこんな異世界にまで広がってるんだ?)

ここへ来て、最大の疑問が持ち上がる。

そもそもなんで異世界の奴らが、日本語で会話してるのか とい
う簡単な疑問だが、あまりに自然すぎて気づかなかったのもまた事
実だ。

よく考えれば、服装だってそうだ。

なぜ巫女さんがいるのか、そもそも気にならなかったのはなぜなん
だろうか。

突然のことだったし、流れがあまりにも早くて考える暇が無かった
ことが原因なのだろう。

「……………どうかなさいましたか？」

ナルフェルが、心配そうに聞いた。

説明をぼーっとシカトし続ければ、確かに心配の一つや二つはされ
るだろう。

「い、いや大丈夫だ。少し考え事をしていた」

「……………もう一度ご説明いたしましょうか？」

「あ、ああ。頼むっ」

畏まりました、とナルフェルは頷き、咳ばらいをする。

「……………この部屋は、先帝ロズモイ二世様が使われていた私室でござい

ます。リヨーガ様の私室になりますね」

「前の魔王の部屋か。この部屋は最初からこうなのか？」

「いえ、部屋のデザインは全て魔王様のお好きなように変えさせていただきます。ロスモイ様は絢爛豪華を好みましたので」

なるほど。

なら、もっと普通に変えてしまうか。

だが、その前にやるべきことがあると思った。

「ありがとうございます、続けてくれ」

「はい。とりあえずは、こちらでお休みになられて下さい。ほかになにか困ったことがございましたら、部屋の外の衛兵にでも申し付けて下さい」

「ああ、わかった」

さつき廊下を歩いてきて、今が夜だとわかった。ちょうど城下街の方角の窓だったのか、ぼつぼつと明かりが見えた。もちろん日本のネオンとは比べるべくもないが。つまりは夜中の時間帯だ。そんな時間まで神と対談してたのか俺は。

「失礼しました、お休みなさいませ魔王様」

こんな挨拶とともに、ナルフェルは扉から出て行った。

とりあえずベッドに腰を下ろしてみる。

部屋が天井のシャンデリアらしきもののお陰で明るいので、眠る気にもなれないのだ。

しかし、アレどうやって光っているのだろうか。

電気なぞあるわけ無いだろうし、やはり魔法だろうか。

『アレか？ アレは雷魔法の呪符で光らせているんだろっな、おそろしく』

「うわっ!?!」

急に聞き覚えのある声が聞こえ、燎牙は思わず驚いた。しかし、部屋を見渡してもその声の主は見当たらなかった。

『たわけ！ 我輩は指輪だと言っただろ！ …………… 声に出さなくても伝わるぞ』

『ん、こついつことか？』

『ああ、そうだ。やればできるではないかまったく』

『……………』

燎牙は右手中指を見た。

昼間、自分が「助言して欲しい」と頼み、神が嵌めた黒色の指輪。けして豪華ではないが、確かな質感がある、『神の半身』。

『まあそれはさておき、どうだ？ 初魔王の気分は？』

『どうって、まだ何もしていないし。……………実感だつてわかねえよ』

実際に今日やったことはといえば、起きて神と会話して魔法使つて裏技使つて巫女さんと話をして部屋で説明を聞いただけだ。

こんなもの、魔王の実感がわくわけがない。

『そうか。……………明日から忙しくなるだろう』

『ああ。……………そういえば、なんでいきなり夜だつたんだ？』

『んん？』

かなり疑問だつたことがある。

燎牙には、起きた時間と今の時間の差がどうしても埋められないでいた。

古流武術を毎日習っていた（習っていた理由は、父が師範だったからだ）が、燎牙の体内時計はわりと正確で、起きたときには、ちょうど8時間寝たという感覚があつた。

その前の晩の寝た時間は、深夜0時だつたので、朝8時に起きたことになる。

すると、どうしても時間が合わないのだ。

今はどう見ても、夜の10時を回っているだろうと燎牙は、窓の外を見て思う。

では空白の数時間、燎牙は何をしていたのであろうか。

『そんなの、我輩が時間操作したからに決まっているだろう』

『時間操作？』

『この世界の時間そのものを圧縮したんだ。そのほうが都合がいい』

『そうだ。召喚士は本来、召喚課という部署で働いている』

『召喚課？』

『召喚士で構成されている部署だ。大規模召喚魔法なんかを行ったり、単に召喚獣の召喚を行ったりする』

『なら部下にはならんだろ。召喚士としての仕事があるだろうしなそれがそうでもないのだよ、と自称神様。相変わらずぐちゃぐちゃな話し方をする神様である。』

『召喚課の召喚士の役目として、今回追加されたのは………といっても今回だけだろうが、な』

『なんなんだ？』

『魔王を無事召喚した者に、魔王直属の政務官になる権利が与えられたんだよ』

『なるほど。政務官ねえ』

政務官とは、まあ要するに魔王の治世のサポートだろうと推測した。というか多分そんなもんだろ。

『まあそうだな。だが』

『？』

『魔王の側近になる、ということとは、その者の位が跳ね上がることを意味するんだよ』

『……………つまり、出世か？』

『まあそうなるな』

……………なんともまあ。

俺は出世の道具だったわけだ。

根本的な理由は違うからまあ我慢出来るけど、出世を餌にするとは情けないな。

クウという召喚士が、出世欲が強い奴かは知らないが、結果的に俺の子は俺の側近になるわけだ。

『なんだかなあ、事情を知ると複雑な気分になるな』

『わからんでもないが、事実だそれが』

どうしたものだろうか。

どうするもこうするも別にないのだが。

『我輩から提案があるぞ、悩める若人よ』

『じじいかよ……………』

『む、失礼な。まだ我輩は328653772歳だぞ！』

『……………』

『ああそうだ我輩はじじいだっ。何かいけないのか？』

『いや、なんもないですハイ』

『……………まったくこれだから最近の若い奴はっ』

白々しくキレて白々しく落ち着いた、こっぴつ風にしかな表現できないくらい淡々と言われると、なかなか困る。

『……………で、提案というのはな』

『あ、ああ』

『寝たらよかるっ!』

『最初からそうするつもりだったよっ!』

まったく、何が『これだから最近の若い奴は』だ。

『聞いて損したわ全く……………』

『まあまあ』

『……………寝るわ』

そういつて、ベッドに倒れこんだ。
だが、またしても問題が。

「照明どうやって消すんだろうか……………」

『テーブルの上に呪符があるだろ? それを軽く二回叩けば消える』

仕組みだ』

「そりゃどうも」

闇の中、燎牙は考えた。

訳がわからないし理不尽だが、確かにやらなくてはいけないことがあるからこそ、召喚されたのだろう。

(とはいっても、気持ちの整理がつかねえよなあー)

家族や友人に別れも告げぬままの旅立ちである。

今頃、居なくなった自分を探し回ってるのではないか、と燎牙は心配していた。

(もしそうだったら、すっげえ申し訳ないな……)

いくら自分から居なくなった訳ではないとはいえ、やはり失踪したら探すのが普通の親である。

未練なんか無いし、とはいったものの、帰れないと知ると色々思うところがある。

(ま、考えてもしゃーねーかあ……)

それよりこれから考えなくちゃなあ。

まずは明日起きてからだな、そう決め込むと、意識が遠くなっていた。

召喚士専用寮の一室。

そこにクウはいた。

事務用の、というか自分用の机に向かいながら、何かを読んでいた。

「なーにしてんのクウ？」

「っ!？」

かなり集中していたため、後ろから声をかけられて驚く。
振り返れば、いつもの顔がそこにあった。

「ま、マリエル！ 脅かさないでよ!」

「ははっ、悪い悪いっ!」

ハイサキュバスで、同僚で、学生時代からの悪友でもあるマリエルは、微塵も悪いとは思ってなさそうな顔をしながら笑う。

いつもそうだった。

昔っからこの、屈託の無い笑顔を向けてくるマリエルを、クウは親友だと思っていた。

なにか疑いがあったわけでは無かったが、単に気になって聞いてみれば。

実際、親友だとも。

そんな風に返された。

「で、真面目なクウちゃんは何をよんでいたのかな？」

「え、あ、コレ？」

マリエルが、右肩から覗き込むようにして聞く。
クウが読んでいたのは、

「コレは魔導書よ」

「へえ、なんでまた？」

すごく不思議そうに聞かれた。
当然といえば当然だ。

クウやマリエルは「召喚士」だが、それ以前に「魔導士」である。
魔導士は、魔法を使う職業の基本。

召喚士になるためには魔導士でなくてはならないため、二人とも一般的魔法なら一通り使いこなせるのだ。

魔導書とは、魔法の書き記された書物を指し、様々な魔法が記録されている。

もちろん、読んだだけで使えるわけではなく、しっかりと練習しなくてはならないが。

だからこそ、マリエルには不思議でならなかった。

「……………明日から魔王様を、リョーガ様を間近で護衛する立場になるし、そんな奴が基本も使えなかったなんて恥ずかしいから復習してたのよ」

「魔王様はリョーガ様っていつの？」

あ、しまった！ とクウが漏らしたところには、マリエルは「リョーガ様かあ……………」などと呟いていた。

クウは謁見の後に、名前を聞かされていたが、本来は明日の戴冠式までは名前は内緒である。

思わぬうつかりをしてしまい、頭を抱えるクウ。

「別に誰にも言わないわよ、全く。クウは少し考えすぎよ」

「あう……………」

「魔法だって私より使えるんだから大丈夫よ。それに……………」

「？」

「ニンゲンのリョーガ様は、私達とは潜在能力が違うんでしょ？」

「え、ええ」

マリエルがいうとおり、クウ達と、異世界から来たリョーガとではもともとの潜在能力が桁違いだった。これはどうも、世界の優劣が存在することに起因するらしく、その差は数百倍と言われている。

「数百倍も違えば、古龍種だって滅ぼせるわよ」

「まあね……………」

実際、リョーガが戦える存在なら、護る筈のクウが逆に護られることになるだろう。

魔法を教えれば、その存在はさらに強くなるだろう。
そうなった時、クウの存在意義は。

「あまりないのよねー」

「ろ、露骨に言わないでよ……………」

こればかりは仕方がないが、諦めきれない。
せつかく側近になるのだから、頼ってもらえる存在でありたい、と
思う。

「まあ、せめてサポートでもできれば、なんてね」

「ふうん」

マリエルは、なんだか納得していないような顔をしていた。
が、「ま、夜更かししすぎんなよー美容の大敵よー」などといいな
がら、二段ベッドの下段に入ってしまった。

クウは、そんな同僚兼親友の様子に苦笑しながら、魔導書へと顔を
戻した。

「……………時魔法、か？」

巨大な闇の中で、ソイツはのそりと顔を上げた。

「この世界でそんな無粋なモノを使うのは、まあ奴しか居らぬわな」

辺りを見回して、今が夜だということを悟る。
煩わしげに欠伸をすると、眠りについた。

「余計なマネをしなければよいのだがな……………」

003 私室と夜闇（後書き）

えー。

文章、雑魚いね。

構想、粕いね。

設定、浅いね。

敬語、わからんね。

いつもの話ならハイスピードで一日が過ぎるところを、この話では引きずります。

なるべく長く書きたいものでして、軽快なものとは思っています
が………どうですかね？」

感想なんかでそこら辺を教えていただけたら幸い、と思います。

では次回予告。

燎「あー、今回から次回予告させていただきます、九条燎牙です」

作「とりあえずお前だけな？」

燎「まあ飛ばされたばかりだしな………」

神「我輩がおるだろう粕作者ッ！」

粕「なっ、粕とはなんだ粕とは！　って、名前も粕に変わってるし
!?!?」

神「粕だからな」

燎「さ、さて次回はー」

神「燎牙が「魔王リョーガ」として、戴冠式に出るぞ」

燎「冠ないからただの即位式だけだなw」

神「そして魔王として、よーやく働き出す怠け者」

燎「別に怠けてはいねーよ!」

神「そしてそしてそこへ突如として現れる粕作者!」

粕「や、でないから」

神「次回、「餃子はチャオズと読むんですよ!」の巻!」

粕「お前帰れ!」

燎「お、お楽しみに〜…」

004 厨二魔王と即位式（前書き）

あー、大変お待たせしました（、 - 、、）

というかですね、テスト期間うざかったですねえはい。

某ぐりいの某竜を集めるゲームの餌食になってまともにテスト勉強出来ませんでしたええはい。

さておき。

そんなわけでなかなか書けず、また即位式についての知識が乏し過ぎて作業が難航していました。

出来上がりは、まあよくはなったかなとは思うものの………。駄作感丸出しですね。

そんなわけでひとまずどごごぞー。

夢の中に、変な奴が現れた。

見たことあるような、ないような、さっきまで見ていたような、会話をしていたような。

「ゲラツチヨ」

「おう、ゲラツチヨゲラツチヨ」

やっぱり見たことあるし、話をしたこともあった。

「で、今度はなんだよ自称神様？」

「自称ちやうわ！」

エセ神様は、どう聞いてもエセ関西弁にしか聞こえない喋り方で否定した。こんなだからエセとか自称とか燎牙と呼ばれるのだが、気づいていないのか受け流してるのか。

「……………起きたら戴冠式だぞ、九条燎牙」

「戴冠式って何をするんだ？ よく知らないんだけど」

「ああ、説明してやるっ」

と言っても明日また説明を受けるだろうがな、とぼやく神様。

「燎牙の住んでいた地球では、主に中世ヨーロッパで行われていた、いわば即位式のようなものだ」

「成る程、俺が魔王になる為の儀式のようなモンなんだな」

「そんなところだ。本来なら、高僧や神官が皇帝などに冠を被せることで完了する儀式だが、この世界では少し違う」

「？」

「まず、魔王は冠を被らないから、冠は使わない。無駄だからというわけではなく、単にそういった概念が無いんだ」

「じゃあ、なんで『戴冠式』って言ってるんだ？」

矛盾もいいところである。

『冠』がないのに『戴冠』とは、笑い話にもならない。

「よくわからんが、かなり昔からこの『戴冠式』ってことばがあるようだ。大方、中世ヨーロッパの王でも召喚したのだろうな」

「ちょっと待った」

ここで、燎牙はかねてからの疑問を思い出した。

『日本でもないのに日本語が通じる理由』、である。メイド服など、どう考えても地球の文化だ。

「ここは異世界なのに、なんで日本の文化が存在したり日本語が通じたりするんだ？」

「ああ、それはあれだ。『平行世界における相当文化言語』という仕組みだな」

「……………はい？」

全くもって意味不明かつ不明瞭である。
相当文化言語ってなんね一体。

「まあカンタンに言えば、『日本語』という言語は、どの平行世界にも必ず存在するということさ。名前は違えど仕組みは同じ言語だから、日本語が通じるんだよ」

「無茶苦茶だなあオイ」

「当たり前だ、その方が管理がカンタンだからな」

基準そこかよ、とか思ったりしたが、あえて言わなかった。
言わなかった理由は、

「全～部聞こえとるよ！」

神様の空間なんだから、別に喋んなくても聞こえるんだな……………。
てか、コレもはやプライバシーとか関係ないな。
神様、あなたただけ傍らに人無きが若し。

「傍若無人といえ傍若無人と」

「ま、まあまあ！」

さておき。

「じゃあなんで、『メイドさん』とか『戴冠式』とか、ヨーロッパの言葉が伝わってるんだ？」

「……………ワカンネ」

「だからまともに喋れよ」

「コレ我輩のまともだから」

「……………まあいいや」

早々に諦めた。

恐らく説得するだけ無駄だし、そもそも利益がなかった。

「我輩の喋り方如何で変わる利益ってなんだよ」

「さあな」

日の光を感じ、燎牙が起きたのは、腹時計でいえば大体朝の6時前だ。

大きな窓の、大きなカーテンから漏れる光は、暖かかった。

起き上がると、ベッドの脇に置いてある靴を履き、窓に近寄った。カーテンの隙間から、昨晚には見られなかった、アークレイド帝国の景色を見ることが出来た。

一言で言えば、雄大。

「……………ッ」

仕事があつてか起き出してきた人が見える城下街。

巨大な門の向こうには、整備されている道と、豊かな緑の森。

遙か彼方には天を衝くような山々が広がり、悠然と聳えている。

(こんな巨大で雄大な国を、俺が……………?)

その事実には、燎牙は少し不安になる。

実際、ほんの一昨日まではただの高校生だったが、すぐに魔王をやって下さいなどと言われても、やるしかない状況だったとしても。

「それは……………どうなんだろう……………」

普通なら「ええわかりましたやります」とはいかない。
当然、戸惑いが隠せないだろう。
無論、燎牙が落ち着いてるのかと言われれば、この通り不安だらけである。

だが、目の前に在るのは事実で、その事実の前に今立たされているのだ。

この雄大な自然も、あの机の呪符も。

昨日出会ったナルフェルやクウやエセ神様も。

全てが事実で、それらは現在進行形なのである。

「……………」

だったら、燎牙がとれる行動はもう一つしかないのである。
則ち、

「……………魔王、やるしかねえか」

幸いというか。

燎牙自身はオカルト大好きだし、厨二万歳だし、魔法ワツシヨイだ。
エセ神様がくれた能力だって使いこなす自信もある。

「そっぴゃ、どーやって使うんだっけ、魔法」

ふと思い返し、頭で『ライター』の魔法を思い浮かべる。

ライターってダサイよなあ、などと考えつつ、『暗黒』^{ダークマター}の絶対記憶

能力により忘れることのない、ライターの魔法陣を頭に描く。

二重丸に重なる六芒星。

一般的な魔法陣に似た、割とカンタンな魔法。

「ライター」

そして詠唱。

右の人差し指の先に、小さな火が燈された。
ここまでが発動手順。

「ライター、ってなんかだせえよなあ」

燈った火を見つつ、ぼんやりと考える。

大体、ライターって使い道あんま無いし、魔王が使うの魔法にしては余りにもインパクトに欠けていると思う。

…ん、インパクト？

「んー、インパクトか」

そういや、エセ神様は相当文化とか言っていたが、インパクトとかは英語だからわからないよな。

だったら、ライターもなんかちょっとかっこよく聞こえるかも知れない。

………ならまあ、いいか。

「魔王なら魔王らしく、なんか魔法作つとかなくちやなあ………」

もっところ、かっこよくて強い奴とかな！

などと考えていると、寝室全体に乾いた音が広がった。

「おはようございます、リヨーガ様」

ドアを開けて入ってきたのは、金髪眼帯のメイド。
ナルフェルだった。

「ああ、おはようございます」

燎牙も挨拶を返す。

なぜか敬語で返してしまったが。
そのナルフェルの後ろから、新たなメイドが二人がかりで豪華な箱を運んできた。

トン、という少し重量のある音と共に置かれたその箱には何が入っているのか。

「リヨーガ様、今日はリヨーガ様の戴冠式となっております。まあ、名前ばかりの即位式ですが」

ナルフェルは笑顔で言葉を紡ぐ。
なんか、眼帯少女の笑顔って、以外というかレアだなあ。

「と、ああはい。んで、その箱は？」

「これはリヨーガ様の衣装でございます」

箱に手をかけながら、ナルフェルは言った。
質感のある、良質そうな木でできた、木箱。

ナルフェルがその蓋を持ち上げると、中には黒基調の、如何にも魔王ですよ的な服が折り畳まれていた。

というか。

「さながら、暗黒勢力だな……………」

「魔王の象徴、闇の化身のようなものですからね」

取り出される服は、黒いファーというか羽毛つきのコートと、学ランみたいな形だが、それより長く、光沢のある、軍服みたいな上着。これまた軍服を思わせるズボンに、脛全体を被えそうな漆黒の皮の長靴。

と、ナルフェルが急に顔を上げた。

「時にリヨーガ様」

「ん、どうした？」

「ピアスの穴などは開いていますでしょうか？」

「ピアス？ 右だけ開けてあるけど」

「畏まりました」

そう言っ取り出したのは、よくわからない形をした、黒色のピアス。

まるで耳の様な形の真ん中に、翡翠色の宝石か何かが埋め込まれて

いる。

「以上で全てになります」

「……………果てしなく厨二だなコノヤロウ」

「これが一応、リョーガ様の魔王としての正装になります。儀式や式典、外交の際のものになりますね」

「ということは、今から着てくのな？」

「はい。着替えに関しては、どうなさいますか？」

ナルフェルが聞いてくる内容は、恐らく。

「あー、一人でやるわ。なんか恥ずいし」

「畏まりました。では外で待機しておりますので」

ナルフェルは一礼をして、扉へ向かう。

背後のメイドさんもそれに倣った。

正直に言って、メイドさんたちに服を着せてもらうわけにはいかなかった。

恥ずかしいのも理由だが、なによりも、「服ぐらいは一人で着られる」という半ば当たり前な矜持が主な理由だった。

さて、いざ着終わってみれば。

「なんだこの厨二衣装。確かに魔王つちゃあ魔王だがなあ……………」

姿見があつたので前へ立ってみればなんだこの格好、という感じである。

これじゃあどこぞの厨二主人公だなあ、などと銀髪オッドアイの高校生を思い浮かべながら、燎牙は目の前に立つ“魔王”を見た。

威厳、ねえなあ……………」。

なんとというか、歴戦の猛者のな、上へ立つ者が纏うオーラのものが燎牙には足りていない。

一言で、ひ弱そう、とも表現出来そうだ。

「ホントこんなんでいいんだろうか……………」

先程の決意が早速瓦解し始めていた。

どこか気怠げな表情の燎牙なんとなく壁を見遣った。そこには、昨夜には気づかなかつた掛け時計がある。

なんとというか、“腹時計”云々がすごく間抜けだったと思い知らされた。

それも先程、ナルフェルによって。

彼女は時計とともに、

「式典は第8の刻ちょうどから始まりますので、第7の半刻には部屋を出ましよう」

という、よくわかんない計画を立てていった。

多分だが、8時には式典を始めるから7時半には出ましよう的なことだと思っ。

「分かり辛えからあとで変えさせよう……………」

と行って、部屋の扉に手をかけた。

謁見の間。

魔王が座する玉座と、縦に長い空間で構成された、で一番大きい部屋。

敵かでならなくてはいけない、魔王の即位式が行われる場所にして、謁見をする間である。

その敵かな式を前にして、魔王の到着を待つ場内は、ざわめいていた。

専ら、新たに魔王となる、『リョーガ様』についての根も葉も無い噂、というか推測だろうが。

と、召喚士にして新たに魔王の補佐となるクウは思った。

昨日見た、漆黒の髪の少年。
自分がこれから一生尽くしていく主。
リョーガ・クジヨウという少年について、少し思案していたことを、
再確認した。

(昨日謁見した際に、何故あそこまで落ち着かっていたのだろうか
……………)

別世界から突然転移させられ、訳が解らぬ内に魔王にさせられても
なお、リョーガは落ち着いていた。
自分なら絶対取り乱すだろう、とクウは思う。
だからこそ、ここまで早い即位式が出来るのだ。

不思議で仕方が無かった。

まあ、と置いて。

「常識に囚われていては、いけませんよね……………」

魔王に仕える自分が、常識でモノを判断するなど、言語道断である。
そう言い聞かせ、よし、と呟いた時。
謁見室の重い扉から音がした。

来るのだ、新魔王が。

謁見室の前の衛兵　恐らく亜人と呼ばれる種族だが　が、その扉を開こうとしているのを見ながら、ファー付きフードを被った燎牙は考える。

（歩いて玉座の前まで、か。なんだか緊張するなあ）

そもそも、式典の類というのは何もなくても緊張するものである。仕方ないと諦め、扉を見た。

亜人の衛兵ともう一人、人間のような見た目の種族の衛兵が扉を開けはじめていた。

あと数秒と経たぬ内に即位式が始まる。

フードを被ったまま　あるタイミングまで臣下に顔を見せないようにする工夫だ　歩くというのも、なかなか奇抜だよとか考えている内に、扉は開いた。

厳かな、式典の空気。

ずらりと整列した、多種多様な種族の臣下。

そして、床より数段高い位置に鎮座する、玉座。

これが俺の世界。
これが俺の、新しい生活。
これが、現実。

その確認に、思わず笑みが零れた。

誰にともなく、燎牙は呟いた。

さあ、行こうか

燎牙は歩き始めた。
扉を潜り、深紅の絨毯の敷かれた道の上へ、一步を踏み出した。
視線を感じる。

一つ、二つ、いや沢山。

それらは、燎牙にとって重力にも等しい、威圧になる。
けて軽くはない、王への圧力。

だが、一步、また一步と前へ歩む。

そうして玉座への階段を上る。
僅か三段ばかりの階段だが、一段一段が恐ろしく長く感じる。

上りきると、そこには司祭のような格好の、人間に近い種族の
者がいた。

燎牙はその眼前で立ち止まる。

それに合わせ、司祭服は語りだした。

「かの異なる大地より出でしニンゲンの魂よ、我等が同胞によつて召喚されしニンゲンよ」

司祭服は続けた。

「この地に参られし貴殿の運命さだめ、どうか聞き届けられんことをぞ願うばかりにございます」

燎牙が、いやリヨーガが魔王になること。それを示しているのだろう。

「そして、我が国に恒久の平和が齎されんことを願います。さてニンゲンの貴方は、この地にて如何なさるお積りか、どうぞ教えてはくれぬだろうか」

問いが来た。

どうするのか。

否、どうしたらよいのか。

答えはこうだ。

「俺は、魔王になるつもりだ」

「おお、なんと。そうであったか」

演技とはいええ、迫真の演技。
年季が入っている。

「さすれば、我等が王として、この国を治めてはもらえぬだろうか」
「勿論だ、尽力しよう」

「 皆の衆、しかと聞き届けたか。この者は、今より魔王と
られる者。我等が主なり」

その声に、ザツと足音がする。

振り向けば、足音の主たちは、こちらに向かって跪ひざまづいていた。

臣下の礼。

それが服従の証しるし拠。

「では魔王様」

声に振り向くと、先程の司祭服はまだ立っていた。

「どうか玉座に御座り下さい。そして宣言してください」

燎牙はその通りに、玉座へと座る。

その間に、司祭服は段を降りて臣下の礼をとる。

玉座に座りながら、燎牙は考えた。

(魔王、か)

実際まだよくわかっていない。

魔王がどういうものか。

だが、決意はした。

元々、理解と諦めは早いほうだ。そうなるよう、育てられてきた。

四歳で父親母親が死んでから、田舎のクソ爺ジジイのもとで暮らしていたが、その頃なんかは、毎日が死と隣り合わせみたいなもんだった。何せ、四歳の子供に向かつて鉈を振り回すような爺ジジイだ。「修業の一つじゃ、刃物になれんかクソ坊主！」とかホントに洒落にもならない恐怖を毎日体験し、心だけは強くなつた。

別に今更あちらに戻りたいとか思うこともなかった。友達は沢山いたし、親友も、挨拶無しに失踪してしまっただが、こちらに俺の存在意義があるなら。やるべきことは、やるべきだよな、と思うわけで。必然と覚悟は固まるのだった。

「今日から俺が魔王だ、よろしく頼む」

だから、燎牙は宣言した。

国を背負って立つに足る、ただ一言からなる言葉を。

「えー、と。新しく魔王になった、リヨーガ・クジヨウだ」

玉座から、下の臣下へと挨拶した。

即位式のあと、なぜか自己紹介タイムに入っていた。

え、こーゆーのって徐々に覚えるモンじゃねえの？ という燎牙の疑問を他所に、自己紹介は進む。

「では儂から。儂は國務大臣を務めさせていただいておりますディアブロ・アールバレストと申します」

先程の司祭服が立ち上がり、一礼した。

見ると、ディアブロの耳は長い。

「ディアブロ、お前らも。俺は種族に詳しくないからさ、その所を教えてくれないかな」

「おお、これは失礼を。儂はハイエルフという種族にございます」

魔王を前にして「儂」なのだから、よほど肝が座っている。

ディアブロが座るとその横の、角を生やしたニンゲンみたいな種族が立った。

「私は参謀長で、二角鬼のジルウェ・オーゲンと申します。どうぞよろしく願います」

「角二本、ね。よろしく」

その次、その次と。

自己紹介タイムは過ぎていった。

(え、コレまさか臣下全員やんの！？)

等と燎牙がたじろいだのは、また別の話である。

その日珍しく起きていたのか、考えごとをしていた。

「ふむ、やはりあの時間の歪みは奴の仕業よのう」

なら、と重たい体を持ち上げた。

確認したくなるな。どれ、久しぶりに会いに行こうかと思った。

「それに、召喚されたニンゲンとやらも気になるし、の

004 厨二魔王と即位式（後書き）

えー、やっぱり難しいですねー。

何せ敬語がいまいちわからないので、いちいち調べるのは骨が折れますね。

でも頑張って行きますのでよろしくお願いします。

あ、感想などでここはこうだろとか言っていただければ幸いです。

では次回予告。

燎「はいまた俺かよ！」

作「しかたないしかなたい。だって新キャラで会話できる奴まだいねえし」

燎「あれは？ ナルフェルは？」

作「今洗濯してる」

燎「なん……だと……!!」

作「ま、サクッと諦める」

燎「はあ、ま、いいや」

作「はははは」

燎「さて、次回はー」

作「いよいよ魔王としての生活がスタート！の前に朝ごはん食べなきゃ！というわけでメシ喰います、そして倒れます！」

燎「殺すな！」

作「次回、「一家に一台クッキングパパはいかが？」、お楽しみに！」

燎「クッキングパパは人だろうがっ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1047w/>

飛ばされ魔王のデタラメな毎日

2011年11月13日21時59分発行